

古代の祭祀遺跡から綠釉陶器が出土することは、長岡京(8世紀後半)の自然流路から多数の祭祀遺物と共に出土している例などから広く認識されており、当遺跡出土の綠釉陶器も少量の出土ながらその個体の性格に符号すると考えられる。当時の流通品の中においても特別な稀少品であるとされ、官衙関連遺跡でも曾我遺跡や国衙関連遺跡を除くと出土量は僅少であり、これは当該期の綠釉陶器などが祭祀具としての側面を持つ可能性を示唆していると考えられる。施釉陶器生産における祭祀的側面の存在は、綠釉陶器の出現期に初めて生起したものではないと考えられており、先行して生産されていた施釉陶器(二彩・三彩陶器)においても、主として非常用品的な面を持つ儀器である器種が多く、その出土場所も寺院や祭祀遺跡に集中するという現象がみられている⁽²¹⁾。当遺跡で営まれていた祭祀行為は、綠釉陶器(奢侈品)や共伴出土した陶硯(円面硯)などの属性から、官司や高位階層と関連する様相が指摘でき、律令的な祭祀(官祭)としての位置付けが成されるものと考えられる。

当遺跡が祭祀空間であったと考えられる可能性の一つとして、曾我遺跡の官衙域との位置関係に注目したい。愛媛県松山市久米官衙遺跡群(久米高畠遺跡)の北西に位置する前川遺跡は、墨書き土器や斎串・墨痕を残す木簡状木製品(人形)・薪炭類の残火遺物などを出土し、自然石を配した河川周辺の祭祀遺跡と考えられており、官衙遺跡群に隣接して来住廃寺跡が所在している。弥勒寺西遺跡も官衙施設(弥勒寺東遺跡)・寺院(弥勒寺跡)と尾根を隔てて所在しており、意図的に祭祀空間を官衙域(政庁)より隔離していることが窺える。当遺跡においても、推定ながら官衙域と考えられている微高地(自然堤防)より北西方向にやや隔たった縁辺部に所在している。曾我遺跡からは僅少ではあるが瓦片の出土もみられ、祭祀空間を含めた周辺の景観を復原(空間的具現化)することで、郡家(官衙)と寺(郷寺)社・祭祀施設(「祓所」)という政・祭両面に亘る地方官衙の様相が、有機的に関連付けられて解明していくものと思われる。

第3節 交通・流通からみた香宗川流域

香宗川流域に展開する官衙関連遺跡として、近年の発掘調査で円面硯や瓦当(複弁八葉蓮華文)などを出土した東野土居遺跡⁽²²⁾が注目されている。官衙関連とみられる掘立柱建物跡や大溝を検出しておらず、出土遺物などから付近に寺院等の施設が存在していた可能性が指摘されている。曾我遺跡を含めた地方官衙の様相を復原する上で、今後の調査結果に期待したい。ここでは流域に展開する官衙関連を含めた遺跡群について検討すると共に、当遺跡の果たした役割について考察してみたい。

古墳時代初頭頃から中世にかけて、香宗川下流域右岸(古期扇状地)を中心とした遺跡群が存在する背景の一つには、地理的に香宗川から支流(山北・山南川)に至る交通手段の結節点として位置付けられることが考えられる。流域に展開する遺跡群は、畿内を中心とした地域と密接な関係が考えられ、畿内方面との交通手段を検討すると、外洋(土佐湾)から香宗川に入り、更に山北川という水運ルートを頻繁に利用していたと推定できる。香宗川河口付近の浜堤に所在する江見遺跡、下流域の自然堤防(段丘低位面)上に立地している東野土居遺跡、山北川を臨む微高地に立地する兎田柳ヶ本遺跡から、完形に近い庄内式土器(甕)が出土している。また山南川右岸の河岸段丘上に立地している押原遺跡⁽²³⁾からも、河内からの搬入品と考えられる古式土師器(庄内式後半)を出土しており、古

墳時代初頭頃には同河川に依拠する水系集落群として展開していた可能性が考えられる。

律令期には各地に官衙関連施設(郡家・郷家等)の成立がみられるようになる。布目瓦片を出土した押原遺跡との関係が指摘されている十万遺跡⁽²⁴⁾は、香宗川と支流(山南川)を臨む丘陵縁辺の微高地に立地している。企劃的建物群が8世紀第3四半期頃に出現するが、その規模を維持することなく繁栄を終えている。十万遺跡に後続する形で盛期を迎えるとされている曾我遺跡は、香宗川と支流(山北川)との結節点を扼する自然堤防上に所在していたと考えられている。河川水運の掌握を意識した占地とみられ、貢進物の集積・運搬に香宗川を利用していたとされている。十万遺跡から曾我遺跡への変遷は、海上交通にも至便な後者の機能がより重要になった結果とも考えられている⁽²⁵⁾。

香宗川は下流域の河床勾配が小さく、水運利用には適した条件を備えているが、一方で河川氾濫という自然災害も伴ってくる。当該地が宗我郷内において重要な場所としての位置付けが成され、祭祀行為が営まれていた可能性は同章第2節で既述したが、県内における交通・流通(水運)の結節点に所在する主な河川祭祀遺跡として西鴨地遺跡の例が報告されている。

西鴨地遺跡は土佐市の中心部である高東平野の西端に位置しており、平野の南部は仁淀川の1次支川波介川が蛇行しながら東流し、河口付近で仁淀川に注いでいる。遺跡は波介川上流域に形成された沖積地に立地しており、標高約12m前後を測る。波介川は緩流河川であり水運に適しているが、低奥型地形のため内水による水害を受けやすく、流域は氾濫原性の低湿地が拡がっている。遺跡は9~10世紀頃を中心とする古代の遺物が主体を成しており、その大半が水路として利用されていたと考えられる自然流路から出土している。流路内からは縁釉陶器を含む多くの搬入品や製塙土器、官的祭祀遺物とみられる木製祭祀具と共に桃核等の種実遺体を複数出土している。また多量の端部炭化材が見つかっており、何らかの祭祀行為が営まれていた可能性が指摘されている。当該地が幡多方面への街道に近接する交通の要衝(結節点)であることや、青銅製帶金具などの出土がみられることから、物資の集積或いは交通を司る官衙、官司層の居宅等に関連する施設が存在したと考えられており、農耕儀礼・祖靈信仰などと共に交通・流通に関わる祭祀が行われていた可能性も考慮される。

曾我遺跡においても、律令期の要路(南海道)が当該地周辺に比定される見解が示されている。阿波経由の「養老新道」(719)は、香長平野を横断する幹道と想定されており、官道の直進指向を考慮し、条里地割(「香長条里」)の企劃方位に沿って検討すれば、南国市篠原の住吉通り付近から、香宗川と支流との合流点付近(香宗川橋近辺)を結ぶ周辺に比定されると考えられる。物部川右岸域では野中廃寺跡(南国市)などが近在し、旧香美・長岡郡境付近には「カントヲリ」の小字も残されている。物部川と交差する地点では下ノ坪遺跡や深渕遺跡⁽²⁶⁾などが所在しており、「渡津」として機能していた可能性が指摘されている。「野市町小字図」には地籍(地割)が企劃的に配され、物部川以東においても段丘上に直進性が看取でき、香宗川を臨む土居付近では中世に至って城館(香宗城跡)の成立をみる。『長宗我部地検帳』には比定地周辺に「大道」の存在を示す記述が散見でき、関連性が考慮される⁽²⁷⁾。

官衙や古代寺院を検討する場合、官道(陸路)の存在が重要となると考えられるが、河川・海上交通との関連性を含めて、それぞれの地域の地理的特徴を考慮する必要があると思われる。当遺跡で考えられている祭祀行為の内容については明らかにすることは難しいが、これらの交通・流通の妨げとなる河川の氾濫に対する祭祀と捉えることも、一つの可能性として考えられる。